資料１

平成 28 年 12 月 9 日

# 第 23 期　第 7 回　材料工学委員会　バイオマテリアル分科会

# 議事要旨案（修正版）

１．日時　平成 28 年 12 月 9 日(金)12:00-14:00
２．場所　日本学術会議 5 階　５－C(2)　会議室
３．参加者　片岡一則、塙隆夫、明石満、春日敏宏、由井伸彦（オブザーバー）、岸田晶夫、西川美雪（日本学術会議）
４．議題
　１．前回議事録（案）の確認　（2016 年 5 月 6 日(金)開催分）

　２．提言について
　　●内容の説明を行った（岸田より）
　　●次の委員会への申し送り（次期の提言の改訂）への意見
　　○インドにおいて、研究資金と人材の集中が顕著である。先進国のものと遜色ない医療デバイスが出始めている。
　　○アジア諸国の台頭が著しい。
　　○基礎研究から実用化に結びつける支援体制が足りない。
　　○文科省・JST の認識から「バイオ」の概念がなくなりつつある。
　　○AMED の設立経緯からして、既存のものを医療に応用するというものであって、基礎研究の観点が抜けているのではないか。
　　○シンポジウムでの AMED の考え方もその通りであった。
　　○AMED と文科省・JST の狭間にバイオマテリアル研究が陥っている。
　　○AMED のミッションは臨床応用研究であるので基礎研究に対する別の支援の仕組みが必要である。
　　○AMED に対する省庁側の誤解がある（バイオ研究に関して基礎研究から臨床応用までの全般を扱っていると考えられているようであるが、実際は応用研究に重点が置かれている、など)。
　　○文科省でのメディカル基礎研究の予算が AMED に吸収されるとの誤解があるのではないか。

○次世代医療を支えるバイオマテリアル関係の CREST 研究領域を立ち上げることも必要である。
○材料研究の中でバイオマテリアルの重要性を訴え続けなければならない。
○若手研究者が育つ土壌が減っている。対策が必要ではないか。
○日本学術会議から「バイオマテリアル分野は AMED の支援の領域にないため、新しい支援の仕組みが必要」との提言が必要。
○医療に関わる研究領域のうち、バイオマテリアルのみが狭間に陥っており、日が当たっていない。
○バイオマテリアルの「基礎研究」の考え方の明確化と社会的位置づけが必要。
○サイエンスとエンジニアリングの違いは「情念」
○「サイエンス」としての側面を表に出す場合には、「役に立たないもの」という印象をもたれないように「未来の医療を変革するバイオマテリアルサイエンス」等の表現としたほうがよい。

３．マスタープランの結果について
○ヒアリングに残った　＝　大型研究計画としては採択された。(WEB 掲載予定)
○他分野との競争は厳しい。
○重点研究計画としては採択されなかった。

４．学術会議主催シンポジウムについて
●今年（平成 28 年）のシンポジウムについて
○AMED の仕組みは強固で、バイオマテリアル研究者の要望が入る余地が無いようであった。
○バイオマテリアル学会では基礎研究と応用研究が混在していて、うまく伝わっていなかったのではないか。
○バイオマテリアル学会の立ち位置を確認・考える機会となった。
○AMED を知るという意味では意味があった。
●平成 29 年のシンポジウムについて
○平成 28 年のシンポジウムの形を継承
○内容について
＊AMED に持って行く以前の研究を支援する仕組みは何か？
＊文科省担当者の参加をお願いする。
＊提言作製に有用な講演者を選択
＊人材育成も内容に含めてはどうか
＊10 年後の未来を創造する内容はどうか。
＊「5 年後に AMED に渡す研究・プロジェクト」というキーワード

＊AMED 担当者の出身省庁を考慮した人選

＊「将来の医療を革新するバイオマテリアルサイエンス」という観点

○日本バイオマテリアル学会に上記の方針を伝える。

５．今後の活動について

○本日の材料工学委員会で継続について議論がある可能性がある。

○材料工学委員会に合わせて開催を検討する。

次回　2017 年 2 月 24 日　12:00-14:00　　文責　岸田晶夫